

宗門安心章

生活信条

いちにちいちど
一日一度は静かに坐つて
からだ
身と呼吸と心を
こころ
ととの
調えましよう

にんげん
人間の尊さにめざめ
じぶん
自分の生活も他人の
せいかつ
生活も大切にしましよう

い
生かされている自分を感じ
じぶん
謝し
ほうおん
報恩の行を
つ
積みましよう

信心のことば

わが身みをこのまま空くうなりと観かんじて
静しずかに
坐すわりましょう

衆生しゆじようは本来佛ほんらいぼつなりと信しんじて
拜おがんでゆき
ましょう

社会しゃかいを心こころの花はな園ぞのと念ねんじて
和なごやかに生いき
ましょう

摩訶般若波羅蜜多心經

觀自在菩薩 行深般若波羅蜜多時 照見

五蘊皆空 度一切苦厄 舍利子 色不異

空 空不異色 色即是空 空即是色 受想

行識 亦復如是 舍利子 是諸法空相 不

生不滅 不垢不淨 不增不減 是故空

中ちゆう 無色むしき 無受むじゆ 想行そうぎやう 識しき
無眼むげん 耳鼻にび 舌ぜつ 身しん 意い
無む

色しき 声しよう 香かう 味み 触そく 法ほう
無眼むげん 界かい 乃至ないし 無意むい 識しき 界かい
無む 無む

明みやう 亦やく 無む 無む 明みやう 尽じん
乃至ないし 無む 老ろう 死し
亦やく 無む 老ろう 死し 尽じん

無む 苦く 集しゆう 滅めつ 道どう
無智むち 亦やく 無む 得とく
以い 無む 所しよ 得とく 故こ
菩ぼ

提だい 薩さつ 埵た
依え 般はん 若にや 波は 羅ら 蜜み 多た 故こ
心しん 無む 罣け 礙げ
無む

罣け 礙げ 故こ
無む 有う 恐く 怖ふ
遠おん 離り 一いつ 切さい 顛てん 倒どう 夢む 想そう

究竟涅槃

三世諸仏

依般若波羅蜜多

故得阿耨多羅三藐三菩提

故知般若波羅

蜜多是大神呪是大明呪

是無上呪 是無

等等呪 能除一切苦真實不虛

故説般若波

羅蜜多呪 即説呪曰

羯諦 羯諦 波羅

羯諦 波羅僧羯諦 菩提薩婆訶般若心經

宗門安心章

第一 信心歸依

難きは佛法なり。われら今さいわいに受け
難きは佛法なり。われら今さいわいに受け
難き人身を受け、遇い難き佛法に遇う、宿
善のいたすところと雖も、佛祖広大の恩徳
に依らざるなし。いかでか歡喜し踊躍せざ
らんや。偏えに信心歸依の心を発し、如説

に修行しゆぎようをはげむべし。空むなしく一生いつしようを過すごして、
永劫ようごうに悔くいを遺のこすことなかれ。

信しんは道源どうげん功德くどくの母ははにして、行善ぎようぜんの本もとはす
なわち歸依きえにあり。至心ししんに合掌がつしようし、篤あつく三さん
宝ぼうを敬うやまうべし。三宝さんぼうとは佛法僧ぶつぼうそうなり。四生ししよう
の終歸しゆうき、万国ばんこくの極宗ごくしゆう、何れいずの世よ、何れいずの人ひと
か、この法ほうを尊たつとばざらん。人ひと尤なほだ悪あしきは
鮮すくなし。よく教おしうればこれに従したがう。それ三寶さんぼう

に歸せずんば、何を以てか枉れるを直うせん。

恭しく大法の淵源をたずぬるに、世尊成道のあかつき、玉歩を鹿苑に運ばして、五比丘のために親しく四諦の法門を説きたもう。三宝この時始めて世に出ず。これを現前三宝と称したてまつる。

世尊ひとたび涅槃の雲にかくれたまえ

ば、大衆悲泣哀恋止み難く、或は石に刻み、
紙に写して、巍々たる光影を末代に偲び、
或いは貝葉に記し、黄卷に録して、一代の
説法悉く万世に伝う。又円頂方袍の比丘衆
はたけく四弘の願輪に鞭うって、上座の真
威儀を、五濁の末世に宛然したもう。みな
これ正法護持の悲願にしてこれを住持の三
宝と名づく。

しかも三宝さんぼうの実体じつたいは、元来がんらい人々にんにん自性じしやうの中うちに本具ほんぐしたれば、自らみづか自じの覚性かくしやうに帰依きえして、
念々ねんねん痴闇ちあんの心しんなき、これを帰依きえ佛ぶつ無上むじやう尊そんと
いい、自らみづか自じの心法しんぽうに帰依きえして煩惱ぼんのう邪見じゃけん
の心しんなき、これを帰依きえ法ほう離り欲尊よくそんという。自みづか
ら自じの柔軟じゆうなん心しんに帰依きえして、自じなく他たなく一いつ
切衆生さいしゆじやうと和敬わけい随順ずいじゆんするを帰依きえ僧そう和合わごう尊そんとい
う。もとより一体いったいにして自性じしやうの靈妙れいみやうを離はなれ

ず、故ゆえにこれを一体いったい三宝さんぼうと名なづく。

上じょうらい来さんぼう三宝さんぼうに三さんしゆ種しゆの別べつありと雖いえども、仔しさい細さいに

点てんけん検けんすればすなわち別べつ異いにあらひとえず。偏へんに

わが大だい恩おん教きやう主しゆ釈しやく迦か牟む尼に佛ぶつの成じやう等とう正しやう覺かくに由ゆ来らい

し、三さん世ぜ一いつ切さいの諸しよ佛ぶつ諸しよ尊そんも、南な無む釈しやく迦か牟む尼に

佛ぶつの一いち念ねん唱しやう名みやうの中うちには含ふくませたもう。され

ば朝ちやう夕せき随ずい処しよに南な無む釈しやく迦か牟む尼に佛ぶつと、一いつ心しんに唱とな

え至し心しんに歸き命みやうしたてまつるべし。

至心ししんに歸命きみようしたてまつるが故ゆえに、今いまより
のち、尽じん未來みらい際さい、誓ちかつて一切いっさいの邪じゃ魔ま外げ道どうに
は歸依きえせざるべし。されば諸佛しよぶつ諸菩薩しよぼさつ無む辺へん
の願海がんかいに攝取せつしゆせられて、殊勝しゆしやうを求もとめんと要よう
せざれども、殊勝しゆしやう自おのら至いたつて、光明こうみやう不ふ尽じんの
生涯しやうがいを恵めぐまるること決定けつじやうして疑うたがいあるべか
らず。

第二だいに 自覺安心じかくあんじん

悲かなしいかな、われら一念いちねんに悟さとれば直じきにこれ佛ほとけとなるを知らずして、却かえつて一念迷いちねんまようが故ゆえに、自みづから凡夫ぼんぶとなりさがる。かくも尊たつとき佛法ぶつぽうを耳みみにしつつも、一向いっこうに信心しんじん歸依きえの心こころなく、生死しょうじの海うみに浮沈ふちんして、三毒さんどく五欲ごよくの妄念もうねんと憎愛ぞうあい取捨しゅしゃの迷執めいしゅうに、日夜にちや造業ぞうごう造作ぞうさして、永劫ようごう出離しゅつりの際きわもなし。

たまたま信心しんじんおこせども、自心佛じしんほとけと知し

らざれば、ただ徒らいたずに狂奔きようほんし、傍家ぼうけ波々地ははじに、佛ほとけを求めもと、法ほうを求めもとて止やむときなし。
憐あわれというも愚おろかなり。

いずれの人も速すみやかに、善知ぜんち識しには遇あい
まつり、無明むみ長夜ちやうやの夢ゆめを捨すて、常楽じやうらく涅槃ねはんに
入相いりあいの、鐘かねに心こころをすましつつ、菩提ぼだい心しんをぞ
おこすべし。

そもそも諸佛しよぶつ出世しゆつせの一大事いちだいじ因縁いんねんは、衆生しゆじやう

をして、佛知見ぶつちけんを開ひらかしめ、衆生しゅじょうに佛知見ぶつちけんを示しめし、衆生しゅじょうに佛知見ぶつちけんを悟さとらしめ、衆生しゅじょうをして佛知見ぶつちけんの道どうに入いらしめんがためなりと、大聖だいしやう世尊せそんは示しめされぬ。

しかも靈山りやうぜん会上えじやうにて、梵天ぼんてん王のうが猷けんじたる、金波羅華こんばらげを拈ねんじつつ、破顔はがん微笑みしやうを賞めでたまひ、正法眼蔵しやうぽうげんぞう、涅槃妙心ねはんみやうしん、実相微妙じつそうみみやうの法門ほうもんを、摩訶迦葉まかしょうにぞ伝つたえらる。

それよりの々々相承し、二十八代菩提達磨
大師をば、わが宗鼻祖と仰ぐなり。得々と
して南海に浮び、三千里外遠く大法を震土
に伝え、黙々として、嵩山に九年面壁なし
たもう。祖師西来意、もとより梁王も識ら
ざるところ畢竟無功德。廓然として聖諦な
く、隻履西に去つてより杳として消息なし。
然りと雖も、祖師もこの土に來たる、法

を伝つたえて迷情めいじようを救すくわんがためなり。不立ふりゆう文もん
字じ、教化きようげ別伝べつでん、直じきに人心じんしんを指ゆびさして、見性けんしよう
成佛じようぶつせしめらる。大悲だいひ恩徳おんとく極きわみなし。
されば爾なんじら言下ごんかに自みずから回光返照えこうへんしやうして、更さ
らに別所べつしよに求もとめざれ。身心しんじんと祖佛そぶつと別べつなら
ざることを知しつて、当下とうげに無事ぶじなるべし。
山僧さんぞうが見処けんじよに約やくすれば、釈迦しやかと別べつならず。
眼めに在あつては見みるといい、耳みみに在あつては聞き

くといひ、鼻はなに在あつては香かを嗅かぎ、口くちに
在あつては談論だんろんし、手てに在あつては執しゅしやく捉やくし、足あし
に在あつては運奔うんぽんす。この何なにをか欠少かんしょうすと、
宗祖しゅうそ臨濟りんざい禅師ぜんじは呵かせられたり。

病やまい何いずれの所ところぞや。病やまい不ふ自じ信しんの所ところにあ
り。即今そつこん聽法ちやうぼう底ていを識得しきとくすれば、自性じしやうすなわ
ち無性むしやうにて、已すでに戲論けろんを離はなれたり。不安ふあん
の心しんを求もとむるに、不可得ふかどくなりと徹てつしてぞ

二に祖そ安あん心じんは得えたまえる。

寒かん暑しよたがいに移うつれども、慧え玄げんが這しゃり裡りに

生しよ死うじは無なしと示しめされぬ。日にち日にちこれ好こう日じつ、

人にん人にんこれ真しん人にん。行ゆかんと要ようすれば即すなわち行ゆき、

坐ざせんと要ようすれば即すなわち坐ざす。餓うえ来きたれば飯はん

を喫きつし、困こんじ来きたれば即すなわち眠ねむる。ただ平へい常じよう

にして無ぶ事じなれば、無ぶ事じこれ貴き人にんと悟さとるべ

し。

第三 行事佛道

正法の道多途なれど、要約すれば、戒定慧の三学を出でず。三学は自の一心に歸し、定慧もと不二にして禅戒一如の妙道なり。

戒とは止悪修善の義、人人心地の様相なり。故に衆生佛戒を受くれば、すなわち諸佛の位に入る。位大覚に同じうし了

る。まさに佛戒を受けんには、無始劫来の
罪障悉くみな懺悔すべし。懺悔せんと欲せ
ば、端坐して実相を觀ぜよ。衆罪は霜露の
如し、慧日よくこれを消せん。已に懺悔し
れば、身口意三業清淨にして、方に菩薩
の大戒を受くべし。

第一殺生するなかれ。もろもろの生命
あるもの、ことさらに殺すなかれ。自ら

殺し、他をして殺さしむることなかれ。衆
生佛性具しぬれば、すなわちいづれも佛子
なり。いかでか殺すに忍びんや。

第二偷盜するなかれ。吾等もとより空手
にして、この世に來り、空手にして又歸る。
一紙半錢たりと雖も、元來吾等に所有なし。
わずかに可得の見あらば、すなわち盜むと
示されぬ。一切の財宝おしみなく、あまね

く衆生しゆじように布施ふせすべし。いかでか盗ぬすむに忍しのび
んや。

第三だいさん邪淫じゃいんするなかれ。自性じしよう元来がんらい清淨しやうじようなれ
ば、行事ぎやうじも自おのずから清淨しやうじようなるを、梵行ぼんぎやうとては尊たつと
べり。たとい夫婦ふうふの中なかとてても、淫みだらの所行しよぎやう
あるなかれ。家庭かていはこれ敬愛けいあいの場にわにして、
子女しじよ養育やういくの道場どうじやうなり。これを乱みだすに忍しのびん
や。

第四妄語するなかれ。得ざるを得たりと

誇り、到らざるを到れりと説くことなかれ。

直心はこれ道場なり。行住坐臥に脚下を

照顧し、愚の如く魯の如く、須らく潜行密

用すべし。自ら独りを慎しむべく、他を欺

むくに忍びんや。

第五飲酒するなかれ。愚痴の酒を飲むこ

となかれ、無明の酒に酔うなかれ。自性靈

妙みょう、主人しゅじん公こう惺せい々せいとして覚さめたれば、随ずい処しよに主しゅとなつて、立りつ処しよ皆みな真しんなり。自みづから自じ性しやうを晦くらまして、他たをして迷めい惑わくせしめんや。

かくの如ごときの菩ぼ薩さつの大だい戒かい、当まさに尊そん重ちやうし珍ちん敬ぎやうすべし。闇あんに明めいに遇あひ、貧ひん人じんの宝たからを得えたるが如ごとし。これはこれわれらが大師だいしなり。今こん身じんより佛ぶつ身しんに至いたるまで、忝かたじけなくも行ぎやう持じして、懈け怠たいの心こころなかるべし。

定じょうとは坐ざ禅ぜん三昧さんまいなり。外ほか一切いっさい善ぜん悪あくの境界きょうがいに向むかつて心しん念ねん起おこらざる、これを名なづけて坐ざとなし、内うち自じ性しょうを見みて動どうぜざる、これを名なづけて禅ぜんとなす。三昧さんまいとは正しょう念ねん相そう続ぞくなり。行ぎょうも亦また禅ぜん、坐ざも亦また禅ぜん、語ご默もく動どう静じょう安あん然ねんとして、専せん一いつに己こ事じを究きゅう明めいするは、坐ざ禅ぜんの要よう諦たいにして、宗しゅう門もん第だい一いちの行ぎょう事じなり。慧えとは智ち慧えなり。佛ぶつ智ちなり。自じ我がの迷めい妄もう

を脱却して、不二の妙道に徹するなり。尽
十方世界は沙門の眼、縦には三世を貫き、
横には十方に瀰淪して、刹土としてわが土
に非ざるなく、瞬時としてわが時光に非ざ
るなし。今この三界は悉くこれわが有にし
て、その中の衆生は皆これわが子なり。
衆生病むが故にわれ又病む。慈悲愛憐せ
ざらんや。劫石たとい消するの日ありとも、

わが願力は尽きざらん。尽未来際、報恩謝
徳の思い、興隆佛法の志、寤寐にも忘るべ
からず。

普ふ回え向こう

願ねがわくば此この功徳くどくを以もつて普あまねく一切いっさいに及およぼし

我われら等しゆじようと衆生みなどもと皆共ぶつどうに佛道じようを成じようぜんことを

十方じつぽう三世さんぜ一切いっさいの諸佛しよぶつ 諸尊しよそん菩薩ぼさつ摩訶まか薩さつ

摩訶まか般若はんんにや波羅蜜はらみつ

佛ぶつ

法ほう

煩ぼん

衆しゆ

道どう

門もん

惱のう

生じよう

四し

無む

無む

無む

無む

弘ぐ

上じよう

量りよう

尽じん

辺へん

誓せい

誓せい

誓せい

誓せい

誓せい

願がん

願がん

願がん

願がん

願がん

文もん

成じよう

学がく

断だん

度ど

平成二十八年五月一日 発行

宗門安心章

発行所

名古屋市中区栄三丁目二十五の十八

臨濟宗妙心寺派

白林寺内

名古屋禅センター

電話 〇五二二四一 五二〇〇

〒 四六〇一〇〇〇八

